

会社概要

株式会社玄米酵素 札幌市北区北12条西1-1-7▶設立・1971年10月
▶資本金1億円▶売上高45億円 (2003年12月期)

起業家新時代

玄米酵素

日本の食生活習慣病の
根絶を目指す

岩崎輝明社長 (59)



BS E (牛海綿状脳症) 問題などで、食の安全と安心が日本人の大きなテーマとなっているが、30年以上前から食の改善による健康を訴えてきたのが玄米酵素(札幌市)の岩崎輝明社長だ。

岩崎は若い頃、慢性胃炎に悩まされ、家族も病気がちだった。「健康保険証の余白がなくなるほどでした」と当時を振り返るが、そんなとき出会ったのが、玄米の発酵や酵素の研究をしていた岡田悦次氏(故人)だった。玄米そのものは消化が悪く、精白米に慣れた現代人には敬遠されがち。だが、麹菌で発酵させた玄米酵素であれば、幼児でも、食が細い

高齢者でも、玄米に大量に含まれるビタミン、ミネラル、食物繊維を取り入れることができる。

家族で試食品を3カ月食べたところ、全員が元気になったという。

「自分の体験を多くの人に広めて、真の健康づくりに役立ててもらおう」。1971年、岩崎はサラリーマンを辞めて会社(玄米酵素)を設立した。

同社の玄米発酵食品「ハイ・ゲンキ」は、玄米を麹菌で発酵させ、それに大豆プロテイン、食用カキ殻カルシウム、スピルリナ(藻類の一種)などを加えて粉末、顆粒、錠粒にし、消化吸収しやすくした栄養補助食品。愛用者はすでに10万人を超えた。

しかし、ここまでの道のりは平坦ではなかった。「薬事法の規定で、玄米酵素を取れば健康になるという宣伝はできず、1軒1軒コンサルティング営業を行って理解してもらいました」という。設立5年目には、創業以来のパートナーと意見が合わず、会社分裂にまで発展したこともあった。

しかし、岩崎はこうした危機が「成長の糧になった」という。苦しいからといってやめるわけにはいかない。「食の改善こそが健康な体をつくることができる」と説いてまわり、共鳴する人々を増やしていった。この結果、全国各地に4000の特

約店と200の代理店、米国、カナダ、台湾、マレーシア、韓国にまで代理店網は広がった。

十数年前には、自然農法による有機無農薬野菜を生産するJAS(日本農林規格)認定農場を立ち上げ、93年には、健全な食生活を啓蒙するための財団法人「北海道食品科学技術振興財団」を設立。現在では、年間3000回以上に及ぶ食生活改善のためのセミナーも開くようになった。岩崎はいう。「2003年の医療費は全国で31兆円、介護費は6兆円。これは国の税収にも匹敵する規模です。糖尿病患者は予備軍も含め1620万人。患者は毎年10万人、予備軍は40万人ずつ増えています。医学が進歩しても、一向に患者が減らないのはなぜか。問題は患者の食生活にある。現代の病の多くはいわば食生活習慣病です」。

食の3原則こそ重要

当面の目標は創業40周年となる2011年までに固定愛用者を国民の0.5%、60万人にまで増やすこと。今年の特約店、代理店と協力して6万人の玄米酵素2週間無料体験キャンペーンも実施している。

しかし、岩崎の目標はただ単に愛用者を増やして利益を上げることではないという。

「明治時代初めの陸軍軍医で薬劑監査だった石塚玄氏が提唱していた食の3原則こそが健康の基本です」

3原則とは、①腸の構造などから、日本人は穀物と野菜中心の食生活とすべき、②地産地消で旬のものを食べる、③魚なら頭から尻尾まで、野菜なら根も葉も、穀物は精白前のものというように、食べ物ではできるだけ全体を食べる——ことだそうだ。

「人間には本来、健康を維持しようとする力があります。体の免疫力も自然治癒力も適正な食事から生まれるもの。国民の多くが食の3原則を実践して健康になってくれることが私の望みです」という。

将来の夢は、食事で病を改善する代替医療施設と自然農法による農場が一体になった施設を作ること。「300年先、500年先の後世にまで玄米酵素と食事療法のすばらしさを伝えたい」。そのために土日も休まず、年間200日の出張をこなす、国内外を飛び回っている。

(敬称略、編集部)

会員募集中



企画協力
毎日起業家クラブ

〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1-1-1
TEL.03(3213)3070 FAX.03(3213)2838